

ニホンザリガニの博物学的知見Ⅲ —名称と利用—

川井唯史*・白濱和彦**

*稚内水産試験場 調査研究部 (〒 097-0001 稚内市末広 4-5-15)
** (〒 047-0154 小樽市朝里川温泉 1-306)

KAWAI Tadashi and SHIRAHAMA Kazuhiko, 2008: Information on the natural history of the Japanese freshwater crayfish, *Cambaroides japonicus* in Japan III. -Name and utilization-

Key words: *Cambaroides japonicus*, Edo era, Name, Utilization, Ezo, Natural History

Abstract,

The freshwater crayfish *Cambaroides japonicus* (De Haan, 1841) is endemic and endangered species in Japan, their name and utilization in Japan were examined based on antique papers and archives in libraries, total 19 papers. The Japanese name of *C. japonicus* was Okurikankiri (after 1712) or Zarigani (after 1781), and native Ainu people in Hokkaido calls it as Tapishitunpekorope, Tekinbekorube, Terinhekuru, Horokaref. The gastrolith of *C. japonicus* had used as utilized medicine for any diseases.

1. はじめに

ニホンザリガニ *Cambaroides japonicus* は北海道全域と東北の北部に分布し、全長は5cm程で、河川の源流部や湖沼で一生を過ごす (Kawai and Fitzpatrick, 2004)、水産庁等が指定する稀少種で (川井、1995)、保全の対象種になっている。本種は江戸時代に貴重で高価な薬品であった。日本の生物を欧州に紹介し、欧州の医学を日本に紹介したことで有名なシーボルトは、頻繁に本種の胃石を使っていた (例えば山口、1993)。なお胃石とは脱皮時期に不足しがちなカルシウムを補うために体内に形成される結石の一種で、大きさは7mm程で乳白色を呈し、江戸時代は高価な薬品で、通称ヲクリカンキリまたはオクリカンキリと称された。

本稿では江戸時代の北海道を中心に、ニホンザリガニの名称と利用に関する史料を集め、日本人と本種の関係の歴史についての既報 (川井・白濱、2008) を補強した。

(国立国会図書館)

- ・『於幾能以志』 (白井文庫、請求記号は特1-3185)。
- ・『本草鏡』 (請求記号は特1-3378)

(国立公文書館)

- ・『東夷集覧』 (請求記号は178-0071)

(北海道大学附属図書館北方資料室)

- ・『蝦夷風土記』 (請求記号は旧記0194)。

- ・『蝦夷言いろは引』（請求記号は旧記0732）。

（北海道大学附属図書館本館貴重資料室・札幌農学校文庫）

- ・『遠西医方名物考』（請求記号は615 U）

アイヌ語の表記方法に関しては、原則として原文の表記に従い、『萱野茂のアイヌ語辞典』（萱野、1996）を参考にした。

2. 結果と考察

1 『倭漢三才圖會』

翻刻本（寺島、1970・1980・1987）の解説によると、出版地は大坂、江戸時代中期に刊行された日本初めての図説百科事典として、医師であった寺島良安によって描かれ記されたものである。なお、寺島は蝦夷地へ赴いた記録は見当たらないため、記述は当時の大坂で得られた情報を根拠としたと考えられる。『倭漢三才圖會』は、数年間を要して刊行した著書であり、刊行は正徳2年（1712年）序頃とされている。翻刻本の底本は不明である。

翻刻本（寺島、1970）ではオクリカンキリの名称は「於久里加牟木里」と記され、鰕蛄（シャコ）の頭の中から得られる小さな結石であるが実際にシャコの体内で結石を見た例は無いと述べられている。泌尿器系の疾病に有効であり、蛮人（ここではオランダ人を含む西洋人を意味すると思われる）の薬とされている。

「鰕蛄 シャコ」と書かれた部分に添付された図には、明らかに海産のシャコ *Oratosquilla oratoria* が示されている。そして本文には未だに実際に石があるのを見たことが無いと述べられている。そのため胃石の由来に関しては、現代の生物学には合致していない部分があると思われる。また作者の寺島良安が大阪の医師であったことから（寺島、1970）、オクリカンキリが大阪で利尿薬等の医療薬として活用され、オクリカンキリは外国人が導入したと考えられる。

2 『紅毛譚問答』

翻刻本（新村、1927～1928；新村、1985）の解説では、底本に関する情報が書かれていなかったが、本書は寛延3年（1750年）に編集、成立し、著者は小倉善就（子因）である。その内容としては、江戸の醫官（医者）が長崎の譯官（通訳）を通じて蘭人（オランダ人）に聞いた質問と、その回答を列挙したものである。以下、大意を示した。

ヲクリカンキリの事。カンキリとは蟹であり、ヲクリとは眼の意味であり、主な薬効は小便の不通や淋病（ここでは泌尿器系の疾病と思われる）である。

記述内容としては、胃石の名称、由来、薬効について書かれていると思われる。このことから、1750年当時、胃石はヲクリカンキリと呼ばれ、これを薬として用いるのはオランダから得た知見であり、主な薬効の泌尿器系疾病であったと読取れる。

3 『紅毛談』

明和2年（1765年）に成立し、江戸時代中期に活躍した本草学者である後藤梨春（光生）によって書かれている。本書は江戸幕府を訪れたオランダ人からオランダの地理、風俗、医薬、医術等に関して聞取ったものである。そのため記述内容は、特に医術関係の知見を正確に示している。

この影印本（大槻、1979）にはニホンザリガニに関する記述があり、以下の通り大意を示した。

おくりかんきり。これはエビの頭に生じる石のことである。その形は酢貝に似て小さい。色
は白色である。淋病等に用いる。

すなわち胃石の名称、由来、形状、薬効が書かれている。そしてニホンザリガニに関する単語としては「おくりかんきり」があり、
薬効として淋病（ここでは泌尿器系の疾病を指していると思われる）等に用いられていたことが分かる。

4『蝦夷風土記』

安永3年（1774年）に成立し、太田包昭（常磨）が安永2年に北海道南部の松前・函館・江差地方を訪れ当地の薬品を求めた記録である。なお、本史料の書誌情報や著者の詳細に関しては不明で、
現在調査中である。

「蝦夷國薬品」として「さりかに」がある（図2）。北海道南部産の本種が、江戸時代の中期頃である1774年にはすでに薬として利用されており、当時の北海道南部でのニホンザリガニの名称が「さりかに」であったと分かる。

この資料によるとオットセイやコンブもニホンザリガニと同様に薬品として扱われていた（図2）。またコンブは現在、薬用では

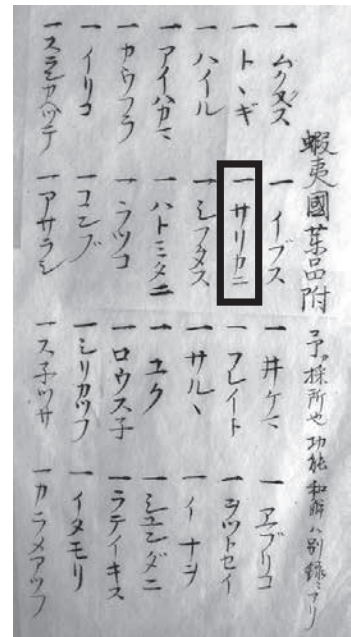


図1 蝦夷風土記

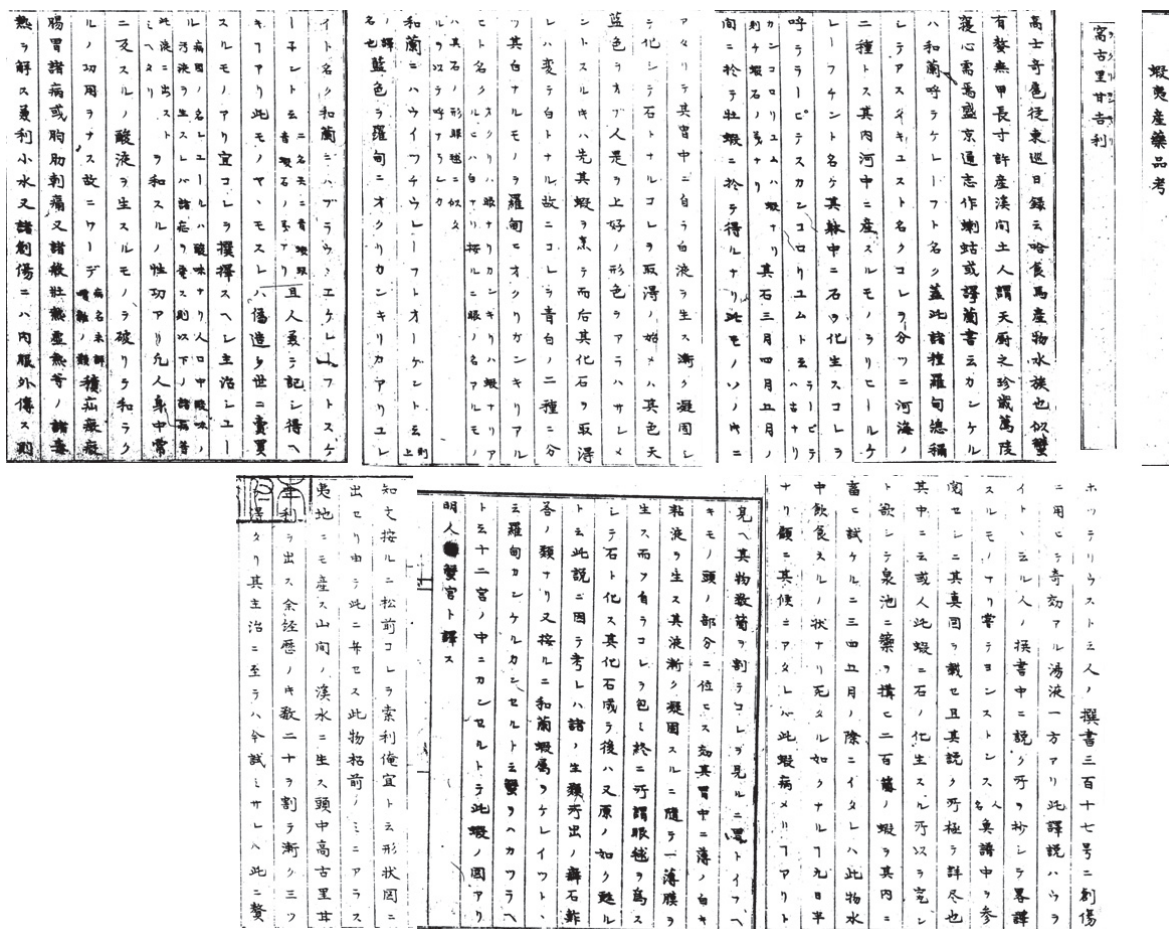


図2 東夷周覽

なく主に食用として利用され用途が変化している。ニホンザリガニも現在、薬品ではなくなっている。これらと対照的に、オットセイは現在でも市販されている有名な精力剤であり、用途は変化していない。

5『松前志』

成立年は天明1年序(1781年)で、別名「北倭志」、著者は松前広長(まつまえ ひろなが)である。『松前志』は松前藩を中心とした北海道の歴史、地理、物産博物誌である。翻刻本(黒田、1979;大友、1972;寺沢ら、1979)によると著者の松前広長(1737~1801)は北海道南部に位置した松前藩の藩士であり松前で生れ育ったので、得ていた知識は実地見聞と考えられる。加えて松前藩の藩政に携わり、藩政の要所に在籍したので、藩内部の資料を始めとした重要で広範囲な情報を得ていたと考えられる。また「シャリガニ」の語源は退行することに由来し、胃石の名称は「オクリカンキリ」で、それは薬として用いられていたことが記述されている。

6『東遊記』

翻刻本(平秩、1929;大友、1943)の解説として、成立は天明4年序(1784年)で、内容は戯作者・狂歌作家として有名な平秩東作(へづつ とうさく)が、天明3~4年に蝦夷地の南部に位置する松前、江差に滞在した際に庶民の感覚で描いた実地見聞録である。そのため幕府が派遣した正式な調査団ではなかったが、記述は正確であり、蝦夷地松前の状況、アイヌの風俗、産物について詳細に書かれている。田沼意次時代の勘定組土山宗太郎に示したものとされる。翻刻本の底本は国立国会図書館所蔵の自筆本である。

翻刻本(大友、1972)の「附録」の部分にニホンザリガニに関する記述があり、胃石の名称は「ヲクリカンキリ」と称され、薬品としての利用方法が国外から持ち込まれたことが読取れる。

7『蝦夷拾遺』

成立は天明6年(1786年)である。著者の佐藤玄六郎(行信)(生年と没年不明)は幕臣であり、天明5~6年(1785~1786)に老中田沼意次の命によって巡察使の一人として蝦夷地に派遣され、北海道・南千島・樺太の地理・人物・風俗・産物・言語・山丹人に関する情報を収集した。実地見聞録であるため、当時の北海道の情報を正確に示していると考えられる。翻刻本(大友、1972)の解説によると、その底本は内閣文庫所蔵である。そして『蝦夷拾遺』の拾遺とは、言い残した事項を補足する意味がある。

翻刻本(大友、1972)によると、ニホンザリガニに関する記述は、「蝦夷言葉之部」で記述され、内容は以下の通りであった。名称は玉蟹、タピシヅンベコルベであり、松前の言葉ではシャリガニで、胃石の名称はヲクリカンキリで紅毛人(西洋人、ここではオランダ人)が導入したと書かれている。

以上のことから、著者は蝦夷地と松前におけるニホンザリガニの名称に関する情報を現地で得た可能性がある。なお『蝦夷拾遺』の標題が意味するものは、蝦夷地で得られていなかった情報を集めること、との意味である。さらに胃石を薬品として利用することはオランダから導入したとの情報も紹介されている。そのため、著者は胃石や、これを産するニホンザリガニに関する情報を既に得ており、これを蝦夷地や松前で確認して記述・補完したと思われる。

8『奥民図彙』

翻刻本の解題（比良野、1977；宮本ら、1970）によると、著者である比良野貞彦は生年不詳で、津軽藩の侍であった。本書の成立に関しては不明である。ただし著者は天明8年（1788年）～寛政元年（1789年）に津軽に行っているため、この時期に実地見聞を行っていると考えられ、内容は信頼性が高い。翻刻本（比良野、1977）の翻刻・現代語訳・解題を作成した森山泰太郎・稲見五郎によると、国立公文書館蔵書には「奥民図彙 写 地 二冊 二一〇函 二七号」と記載されているが、表紙に貼付した題箋の筆蹟も本文と同一であること、さらに挿画の筆致が極めて巧みなことが理由で、自筆原本と考えている。

ニホンザリガニは下巻に記述されていた。内容としてはニホンザリガニの背面図、側面図とその胃石が描かれ、これに文章が添付されている。文章には分布域と生息環境が書かれている。ニホンザリガニの名称として、「サリカニ」、「退蟹」、「ヨクリカンキリ」があった。そのため1788年頃の青森西部でのニホンザリガニの名称が理解でき、胃石に関して関心が寄せられていたことも類推できる。

9『夷諺俗話』

蝦夷地に出張した幕府の吏員であり、和算家の串原正峯により作成され、幕府が現在の北海道北部に位置する宗谷地方で試みた御救貿易のために調査である（串原、1962）。なお串原正峯は北海道の知見を幕府に広く紹介した最上徳内の師としても知られている。成立年は寛政4年序（1792年）で、著作の内容としては蝦夷地の風俗習慣、産物等の紹介である。翻刻本（高倉、1969）の底本は市立函館図書館所蔵の写本であり、これはいくつかある写本の中でも比較的正確であると評されている。

ニホンザリガニの記述は「巻二」にあり、「舍利蟹」、「タビシトンベコロベ」、「ヨクリカンキリ」の名称がある。薬品としての利用、味噌による採集方法が書かれている。その他にも、胃石の取り出し方として、尻に玉のような瘤が形成された後に死亡し、この瘤から薬品であるヨクリカンキリが生成できると述べられ、また飲水が濁った際にニホンザリガニを捕えて水中に置けば、清水となることも記述されている。

胃石の取り出し方と濁り水を清水にする記述に関しては、現代の生物学と照合すると違和感があるものの、これらは「胃石が体内に形成される」「ニホンザリガニが嗜好する生息環境は清水」「味噌による採集は可能」と言った部分は現代の生物学の情報と合致している。そのため記述は、比較的正確な部分が多いと評価できる。

10『蘭説弁惑』

本書は寛政11年（1799年）に、大槻玄沢によって書かれた（大沢、1979）。著者は江戸時代の蘭学者であり、医術に詳しく、和蘭語学を大成した。本史料は先生が弟子の質問に回答する問答集の形式をとっている。この書物の「巻之上」にはニホンザリガニに関する記述があり、胃石に関しての質問に回答する形で解説を進めている。なお影印本（大槻、1979）の記述を参考にして、以下に大意を示した。

「おくりかんきり」とは、国内の津軽松前に分布する「さりかに」というカニの体内に形成される結石であり、オクリとは目のことであり、カンキリとは（カンケルであり）蝮のことである。目とは胃石の形から由来している。主治効能は『蘭畹摘芳』の中に詳しく記述されて

いる。

以上のことから、ニホンザリガニに関する単語としては、「おくりかんきり」(＝オクリカンキリ)、「さりかに」(＝サリカニ)であり、胃石が日本の北部でも採集されたこと、そして「おくりかんきり」の語源が示されている。

11 『東夷周覧』

著者は藤知文(とうちぶん)(本名は福居芳麿、ふくいよしまる)である。江戸の人で幕臣、享和1年(1801年)に幕命により蝦夷地に渡り文化4年(1804年)には再び蝦夷地に渡り、箱館を訪れている。没年は不詳であるが、天保の始め頃か、と記述されている。広い範囲の知識を持つ人物であった。本史料の成立年は享和1年(1801年)で、現地見聞録として、蝦夷地の詳しい地理と風俗等が書かれている。高倉新一郎の手書きによる写本(市立函館図書館、1969; 高倉、1930)はあるが、その底本は北海道庁所蔵とされている。そのため、以下に著者等の理解に基づく大意を示した。

「蝦夷産薬品考」

「ヲクリカンキリ」

清の高士奇の『扈從東巡日録』によれば、哈食馬の産する物といい、水生である。形は蟹に似ており、鋏はあるが甲羅は無く、大きさは一寸ばかりである。溪流に棲息している。土地の者たちは、これを天の恵みとしている。同じく『盛京通志』では、これを蜋蛄としている。或る蘭書によれば「カンケル」はオランダ語で「ケレーフ」と云うとある。これらを総称して、ラテン語では「アスタキウス」という。蜋蛄には川と、海に棲息する2種類があるが、川に棲息するものを「リヒールケレーフチン」と云い、その体内に生じる石を「ラーピデスカンコロリウム」と称している。ラピーデは石を意味し(ラピーデはラーピデス?)カンコロリウムは蝦である。すなわち蝦の石を意味するのである。これは、毎年3月から5月頃の間におス蝦から取得するが、この頃になるとおス蝦の胃中に白い液が溜まり、これがだんだん固まり石のような状態になった時これを取得するのである。この石は体内では非常に綺麗な藍色をしているが、蝦を煮てから取得すると、これは鮮やかな白色に変ずる。この白色のものを、ラテン語では「オクリカンキリアルヒ」と称する。オクリは眼の意であり、カンキリは蝦、アルヒは白色を意味している。「眼」を意味する語があるのは、この石が眼球に似た形状をしているからと思われるのである。オランダ語では「ウイッチウレレーフトオーゲン」と云うが、これは前述したとおりである。ラテン語では、藍色は「オクリカンキリカアリュレイ」と称する。オランダ語では「ブラウエケレーフトスケーネン」と云うが、オランダ語は青蝦眼を意味し、ラテン語では青蝦石を意味するのである。世間では、これを偽造し販売している者がいるようだが、その真偽は目で見ただけでは識別できないので、慎重に選んで手に入れるべきである。さて、このオクリカンキリの主たる効能は、「シュール」を中和することにある。「シュール」は酸味という意味である。人間は口中に酸液が生ずれば諸病を発症するといわれている。以下、そのことを記す。ヲクリカンキリは人体中に生ずる酸液を中和する効能があるので、ワーデ(胸やけか?)や腹、胸、脇腹、胃等の痛み、腹中のしこり、あるいは諸種の熱症治療に効果があり、また小水の通じや、傷治療に内服、塗布するのも良いとされている。ホッテリウスの書には、これを煎じて用いれば、傷を治すのに非常な効能があるとしている。これらは、ウライトという人物の著書にある説を抄訳したものである。私は嘗

てヨンストンの魚譜にあった蝦石を生成する図を見たことがあるが、それは極めて詳細なものであった。その書に説くところでは、なぜ蝦の体内に石が生ずるのか、またそれはどのような状態で発生するのか等を調べるためには、池の柵を設け200尾ほどの蝦を飼育することが必要である。蝦は3月から5月の間に全く餌を食べずに恰も死んでしまったような状態が10日ほど続くが、この病気にかかったような蝦を数尾捕えて、解剖してみるとその胃中に初め白い粘液が生じその後、液が固まり始めるに従い粘液がそのまわりを包み、そして終には固形化して眼球状の石となるのを見ることができるのである。その後、蝦はもとのような元気になるのである。これらのことは、考えてみると多くの魚や獣類などが体内に持つところの結石類と同様のことなのである。又、オランダ語では蝦類を「ケレイット」と云う。ラテン語では「カンセルカンセル」という。蟹は「ハカツラヘ」という。古代天文学にいう12宮の中に「カンセル」という蝦の図があるが、中国の明では「巨蟹宮」と訳している。私が考えるには、松前地方ではこれらを「索利俺宜」（さりがに）といい、その形状は図にしているので、ここではふれないが、この蝦は松前地方のみではなく蝦夷地においても棲息しているのである。山間の溪流に棲み、その頭中にヨクリカンキリが生ずるのである。私がこの土地を調査した時20匹のサリカニを調べて、ヨクリカンキリを取得したのは3匹のみであった。その主たる効能については、実際に試していないので、此处では触れないことにする。前記の3匹分のヨクリカンキリは現在も私が所蔵しているが、その他の薬草類を含め数百点もあり、未だにその全てについて調査研究を終えていない。何時かこの物に興味のある識者の現れるのを待っているのである。

当時の胃石の名称は「ヨクリカンキリ」であり、これは諸病に効く薬と認識されており、薬としての利用法は国外から導入したと思われる。記述で特に多いのはオランダであり、その他にも中国の情報も書かれている。そして北日本にもヨクリカンキリを産出する生物が分布すること、胃石の由来が示されている。胃石の採集に関しては自らの体験に基づいて書かれているので説得力がある。なお北半球のザリガニ類の主な脱皮時期は初夏であり、脱皮時期には動きが鈍くなることも経験的に知られている。そのため本史料の記述は科学的に正確であると思われる。

12『蝦夷の島踏』

成立年は享和1年（1801年）、内容は享和元年、羽太正養の東蝦夷およびクナシリ島巡見に随行した幕吏の、和歌を交えた雅文体による旅日記である。作者は福居芳麿（ふくいよしまる）（別名、藤知文）（とう ちぶん）、で詳細は前出の『東夷周覧』で述べている。『蝦夷の島踏』は現在4点が存在し、市立函館図書館蔵本を底本とし、国立国会図書館の所蔵本を参考にした翻刻本（板坂、2002）、そして国立国会図書館所蔵本の影印本（寺沢ら、1979）がある。

影印部（板坂、2002）によると、「松前 箱館 シャリカニ」などの文字が読取れ、1800年代初期当時の北海道南部におけるニホンザリガニの呼び名が分かる。しかし翻刻部（板坂、2002）を通読したところ、ニホンザリガニの詳細な記述は探し出せなかった。

13『蘭畹摘芳』（刊本）

著者は大槻玄沢であるが、影印本（大槻、1980）の解説部分によると、常陸文庫、内閣文庫と東京国立博物館所蔵の本を原本にしており、この底本は弟子が書き写した著者による原典に近いものとされており、成立は寛政4年（1790）～天保2年（1831）とされている。なお『蘭畹摘芳』

には筆写本と刊本があり、後者は前者の一部分のみの内容である。大槻（1980）は、本書の成立背景を以下のように解説している。大槻玄沢の弟子が、西洋の薬品等に関して質問し、大槻が回答したものを『蘭畹摘芳』と呼んでいた。ニホンザリガニが記述されていたのは「卷之三」で、この部分ではニホンザリガニの他に各種の薬品等が紹介されている。ただし本稿の著者らは江戸時代の医学用語に関しての深い知見が無いため、これらを中心に再検討の余地は残されている。また本史料のニホンザリガニに関する記述の該当部分は長大であり、影印本（大槻、1980）のうちニホンザリガニに関する部分を抜粋した。さらに本史料は梶島（1997）によって詳細に解説されているので、これを参考として、大意を以下に示した。なお以下は、『東夷周覧』の大意と重複する部分があり、恐らくは同一の蘭書から引用していると思われる。

「蜋蛄（サリカニ）圖」「阿骨カ甘吉利（オクリカンキリ）」

ヨハネス・オーエツによれば「オクリカンキリ」は、カンケルまたはカンセルともいい、カンケルは蝦を意味し、オクリは眼の意味とある。オランダ語では「ケレイフトオーゲント」すなわち蝦の眼である。ラテン語では「アスタキウス」と総称している。蜋蛄には川と、海に棲息する2種類があるが、川に棲息するものを「リヒイルケレイフテン」と言い、その体内に生じる石を「ラーピデスカンコロリウム」と称している。ラピデスは石を意味し、カンコロリウムは蝦の意である。すなわち蝦石である。これは、毎年3月から5月頃の間にオスの蝦から取得するが、この頃になるとオス蝦の胃中に白い液が溜まり、これがだんだん固まり石のような状態になった時にこれを取得するのである。この石は体内では非常に綺麗な藍色をしているが、蝦を煮てから取得すると、これは鮮やかな白色に変ずる。この白色のものを、ラテン語では「オクリカンキリアルビー」と称する。前述したようにオクリは眼の意であり、カンキリは蝦、アルビーは白色を意味している。すなわち蝦白眼である。「眼」を意味する語があるのは、この石が眼球に似た形状をしているからと思われるのである。なお、中国人は猿の体内に生ずる石は形が「棗」に似た形状をしているので「猿棗」と名付けているが、よく似た話である。オランダ語では「フコウツケレイフトオーゲント」と云うが、これは前述したとおりである。ラテン語では、藍色は「プラーウユケレーフトステネン」と云うが、オランダ語は青蝦眼を意味し、ラテン語では青蝦石を意味するのである。世間では、これを偽造し販売している者がいるようだが、その真偽は目で見ただけでは識別できないので、慎重に選んで手に入れるべきである。さて、このオクリカンキリの主たる効能は、胃中の酸液をよく中和することにある。故にこの酸液により発生する「おくび」「胸やけ」を始め「胃痛」や胸部、脇腹等の痛みに効果があり、又各種の熱症状によく効き、更には傷などの症状回復にも効果があることである。一方、ポテリウスの書にはこれを煎じて用いれば、傷を治すのに非常な効能があるとしているので、参考にすべきである。また削墨児（ショメル 百家工芸諸韻府書）の書には、酸液などを中和し、血を浄め、小水、大便の出を良くし、血止めや嘔吐の症状などにも効果があるとしている。さて、前記のような諸説はオーエツやフランスのショメルの選書にある説だが、私（玄沢）がこれを抄録したものである。私は嘗てヨンストンの魚譜にあった蝦石が生成する図を見たことがあるが、それは極めて詳細なものであった。その書に説くところでは、なぜ蝦の体内で石が生ずるのか、またはそれはどのような状態で発生するのか等を調べるためには、池に柵を設け200尾ほどの蝦を飼育することが必要である。蝦は3月から5月の間に全く餌を食べず恰も死んでしまったかのような状態が10日間ほど続くが、この病気にかかったような蝦を数匹捕えて、解剖してみるとその胃中に初め白い

粘液が生じその後、液が固まりはじめにしたがい粘膜がそのまわりを包み、そして終には固形化して石となるのを見ることができるのである。この蝦は元のように元気になるのであるが、蝦の胃というのは、蝦のいわゆる頭の部分である。これらのことは、考えてみると多くの魚や獣類などが体内に持つところの結石類と同様のことなのである。（本稿著者注：以上は蘭書の引用であり、以下は玄沢の得ていた知見と思われる）

調べてみると、わが国の津軽や松前地方の山間の川には、この蝦が多く棲んでいるとのことである。その地方の方言でこれをサリカニとっているようである。その形態は頭部が蟹に似て尾部は蝦によく似ており、これは水中、陸上共に後に退り歩むので「去り蟹」の名がついたのである。津軽地方では板留村（現黒石市）の川に多く棲息しており、松前地方ではこのザリガニが味噌を好むので、これを溶かして川上から流すと群れ集まると云われている。蝦夷地でもまた多く棲息している。アイヌ語では「タピシトンベコルベ」と云うが、これは鎧を着用している意味である。また「テキンベコルベ」とも云っている。松前地方では「ザレガニ」とも云っている。中国清代に書かれたものには蜋蛄・拉姑などとあるが、これらについて以下述べてみることにする。清の高士奇の書いた『扈從東西巡日録』によれば、拉姑は哈食馬の産物といい、水生である。形は蟹に似ているが甲羅は無く、大きさは一寸ばかりである。溪流に棲息している。土地の者たちは、これを天の恵みであるとしている。同じく、『盛京通志』では、これを蜋蛄としている。私、大槻茂質が調べてみたところでは、この蝦は従来からわが国に棲息しているのだが、世間ではその詳しい実態が殆ど知られていなかったのである。津軽藩の医師の菅東伯が初めて津軽地方で云うところの「サリカニ」が、清国の諸書に記述されている「蜋蛄」であることを知り、これを世に知らしめたのであるが、それは今から20年程前のことである。又同じ津軽藩医の樋口道泉が以前私に語ったところでは、弘前城下の小川や山間の溪流では何処でも多くのサリカニをみることができるし、素早く逃げ隠れするので捕えにくいのだが、土地の子供たちは上手にこれを捕え、煮て食べているとのことである。その効能としては、下痢症状などによく効き、また小水の通じなどにも効能があるとのことである。秋の頃、これを捕えて解剖してみると「石」のあるのは100匹中20～30匹に過ぎないのであるがその大きなものは鉄砲の弾ほどあり、小さなものでも大豆ぐらいの大きさがある。その形態は舶来のもものと異ならない。水腫病や小水不通にはこれを煎じて服用させれば効果がある。但し小水二三合ばかり出て、なお腫れが引かない者は、その後の効果はないだろう。その他の病状にも効能があるが、土地の者どもはそのことを知らないようである。この蝦は常には溪流の石の間や下に潜んでいるので、捕えるのは難しいのだが、上流から味噌を溶かして流すと群れ出てくるので捕えるのが容易になる。しかし、この蝦が本当に味噌を好むのかどうかについては、よく解っていないことである。人々が、この蝦を養殖しようとしても20～30日の間に死滅してしまうが、これはこの蝦がどのようなものを食餌としているのか全く解っていないからである。

以上の解釈から、当時、使われていたニホンザリガニの名称は「蜋蛄」「サリカニ」であり、松前では「さりかに」「去り蟹」、アイヌ語では「タピシトンベコルベ」「テキンベコルベ」であったと思われる。なお「蜋蛄」「拉姑」は、中国の名称をそのまま示してしているものと思われる。名称の由来としては、「さりかに」「去り蟹」が退行する蟹の意味であり、アイヌ語の「タピシトンベコルベ」は鎧を着用している者を意味する。なお胃石の表記は「阿骨カ甘吉利(オクリカンキリ)」であったと分かる。

利用方法としては、薬用であり、薬効は酸の中和、利尿作用等であったと思われる。胃石を薬として利用することはオランダから導入した知見であったと思われる。そして貴重な薬品を産み出す生物に関して中国の書物を利用して紹介し、国内にも分布するニホンザリガニ自体と胃石の入手に関しての知見を示したと思われる。

14『遠西医方名物考』

著者の宇田川榛齋（または玄真）（1769～1834）は、大槻玄沢に就いて蘭学を学び、オランダ語が堪能な洋学者・医者・蘭学者でフランスのシュメールの百科事典の蘭語版を翻訳し、シーボルトとも親交があった。これを補遺した医者・蘭学者の宇田川榕菴（1798～1846）（名は榕、号は緑舫）はシュメールの百科事典を翻訳し、医学を中心とした化学・科学などの分野で礎を築き、蘭学中期の大立者とされている。

『遠西医方名物考』とは文政5年（1822）に成立し、天保5年（1834）に補遺され、江戸時代に海外から持ち込まれた薬品や薬物の一覧である薬学書の一つである。薬物がイロハの順で配列され、産地、形、作り方、薬効、使い方が示され、西洋の薬と中国・日本の薬と照合している。そして日本に無い薬は性状を調べ、代用できるものは挙げているので、西洋の薬学の集大成となり、広く普及した。以下、大意を示し、ザリガニに関する関連部分も図3に示した。

サリカニ

蜷蛄

『盛京通志』では、これを蜷蛄としている。身体は蟹だが、尾は魚に似ており、水流の中の石がある所に住んでいる。食することが出来る。『訓蒙字会』では、これを螯と記しているが、

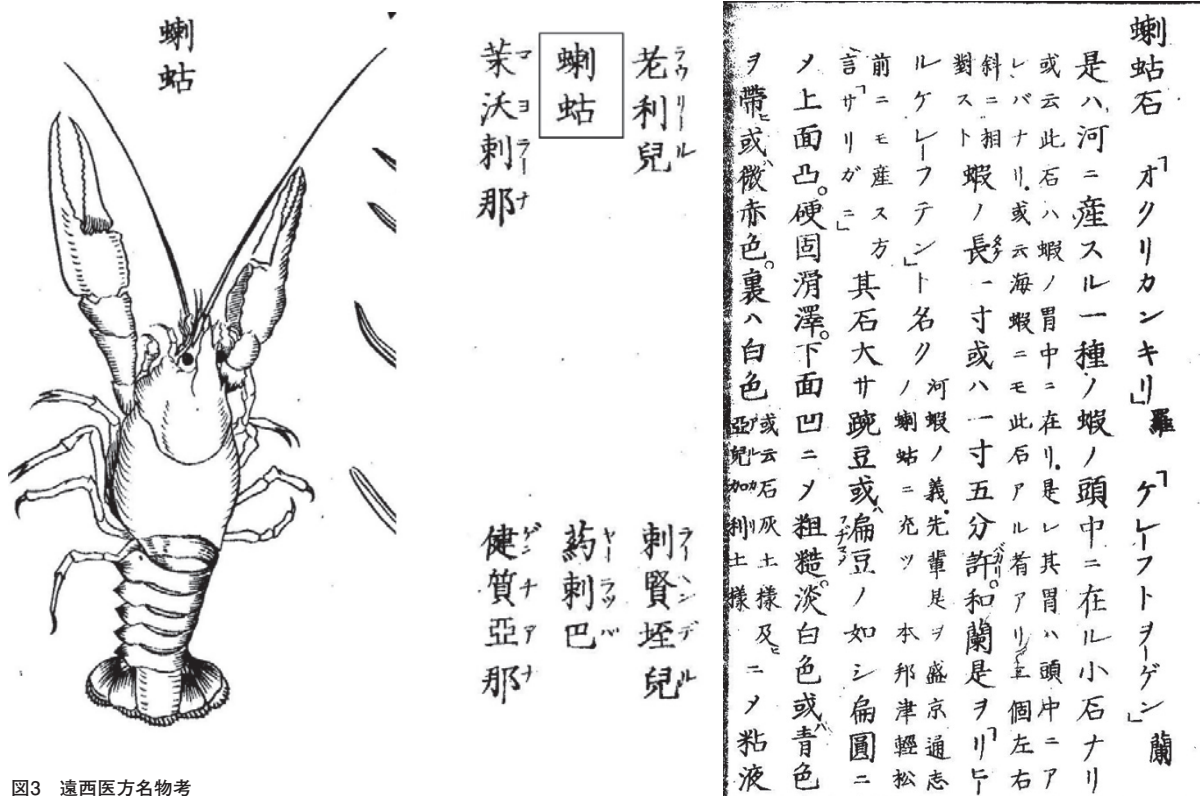


図3 遠西医方名物考

質ヲ夾ミ香味ナク碎ケ易シ○夏月牡蝦ノ胃中ニ
白液生シ初ノ軟ニ漸ク凝固シ石トナル此時自
ラ瀉下シ或説ニ蘇軾或ハ其蝦ヲ剖テ取ル其剖テ
取ル者ハ青色ヲ帶ブ是ヲ上品トス或ハ蝦ヲ煮テ
取ル是ハ白色ナリ故ニ青白ノ二種アリ○此石ハ
蝦ノ舊殼脫シ新殼更ル時ニ生シ是ヲ以テ新殼ノ
軟脆ナルヲ硬固ニス故ニ新殼軟脆ナル時速ニ剖
テ其石ヲ取ベシ殼既ニ硬固トナリテ剖クハ此
石絶テ無シト云○此石偽造ノ品多シ眞品ハ較重
ク破碎スレバ片々層襲ス蒸餾スレバ揮發竄透ノ

精液揮發鹽臭氣アル稠キ油出ツ又一種ノ魚腥ア
リ此石ヲ醋ニ浸セバ其含ム所ノ土質ハ溶化スレ
凡粘液質ハ消化セズ依然トシ其石ノ全形ヲ存ス
或ハ是ヲ消石精ニ浸スモ亦然リ○偽造ノ品ハ醋
及ビ消石精ニ溶化スルヲナシ○此蝦亞細亞洲亞
弗利加洲ノ諸國ニ産ス歐羅巴洲亞墨利加洲ニモ
産スレ凡其石小ナリ

○按ニ此物舶來アリ又津輕松前ニモ産ス藥鋪
ニオクリカンキリト呼ブ偽品甚ダ多シ右ノ譯
説ヲ以テ眞偽ヲ辨ニ用フヘシ○本邦長門ノ赤

間關並ニ豊前中津邊ノ河ニ産スル尋常ノ蟹ニ
小石アリ形狀蓬萊仁ノ如ク上面凸ニ下面凹
其蟹七八月ノ間舊殼脫シ新殼生ス其殼ヲ脱シ
了ル時捕ヘテ剖ケバ必ズ其兩眼ノ間ニ二個ノ
白石アリ但殼ヲ脱シ其體仍軟ニ未ダ跋歩ス
ルヲ能ハザルヲ窺ヒ速ニ取ベシ否ザレバ其石
頃刻ニ溶化ノ米泔汁ノ如クナリ殼硬固ヲ爲ス
ト云是レ蜷蛄石ノ一種ニ其性功モ亦同シ
主治性收滿乾燥ス土質ニ亞兒加利性ノ鹽ヲ含ミ
專ラ酷厲ナル酸敗液ヲ消劑スル一良藥トス○其

質ニ多ク粘液ヲ含テ石灰質ノ土ヲ夾ムユエニ他
ノ土質ノ制酸藥ニ比スレバ亞兒加利性酷烈ナラ
ズノ胃ヲ刺激セズ是其含ム所ノ粘液質ニテ感觸
ノ敏ナル胃中ノ神經ヲ包攝ノ保護スレバナリ故
ニ酷厲ナル酸敗液アリテ胃ヲ刺激シ或ハ胃中ノ
神經剝裸スルヨリ起ル胃痛ヲ治ス○此物亦他ノ
土質ノ藥ノ如ク大便ヲ閉ル故ニ大黃或ハ適宜ノ
下劑ヲ兼用ノ通劑セシムルヲ肝要トス○此藥ハ
粘液ヲ含テ軟化ノ性アルユエニ疼痛ヲ兼ル諸症
ニ尤驗アリ其功麻痺濕失強過爾按ニ減セズ故凡

酸敗液ヨリ起ル諸症即チ吞酸嘈雜胸脇心腹刺痛
或ハ小兒痢疾ノ諸症諸骨軟弱佝僂病等ニ偉効ア
リ○小便ヲ利シ汗ヲ發シ下利ヲ止メ粘稠ヲ稀釋
シ凝結ヲ疏解スル効ヲ稱ス○服量未トシ一タヨ
リ一錢マデ日ニ數次用フ○瓦芎別里鹽ヲ加ヘ用
ヒテ諸病毒惡液ヲ汗ト小便ヨリ驅泄ス○是ヲ橙
汁或ハ蒸餾醋ニ加ヘ其沸動止ムニ至リ用テヨク
發汗ス

また蟹と呼んだり、刺古と呼ぶこともある。更には倒虫などと称することがあるとしている。この蟹の頭の中に「オクリカンキリ」が存在するが、小さなものには無い。蛸蛄石—ラテン語で「オクリカンキリ」、オランダ語では「ケレーフトヤーゲン」と言う。これは、河中に住んでいる一種の蝦の頭の中にある小石のことである。

一説には、この石は蝦の胃の中にあると言われているが、これはその胃が頭の部分に位置していることから言われていることである。また、海に住んでいる蝦でこの石を二個持っているものがあると言う。蝦の身長は3cm乃至4.5cm程度で、オランダ語で「リヒールケレーフテン」と云うとある。これは河蝦を意味しており、先人は『盛京通志』でいうところの蛸蛄だとしている。我国では、津軽や松前地方に棲息しているものであるが、これらの地方ではサリカニと称している。この「蛸蛄石」と称する小石は豌豆あるいは隠元豆くらいの大きさで平たく、表面は少し盛り上がっているが固く滑らかであり、その色は淡い白色、青色或は微かな赤色などいろいろである。裏面はザラザラとしてきめが粗く、凹んでおり白色であるが、粘液質を含み味も匂いも無く、砕けやすいものである。一説には「石灰土様」及び「アルカリ土様」とのことである。

盛夏の頃、雄蝦の胃の中に白い液が生じてくるが、これがだんだん固まり石となった後、体外に出す。(或は、春秋の二期にこの石を体外に出すということである。)

また、この雄蝦を捕獲し、その胃を切り開いてこの石を取り出すこともあるが、その色は綺麗な青色で、これが上級品とされている。この石の取り出し方法は、蝦が脱皮する時にこの石が生成するので、蝦の新しい殻が未だ柔らかい時にその胃を切り開いてこの石を取り出すのが良いとされている。蝦の新しい殻が固くなってから切り開くとこの石は全く消滅しているとのことである。一方、雄蝦を煮てからこの石を取り出すこともあるが、その場合石の色は白色である。このように「蛸蛄石」には青色と白色の二種類があるのである。この蛸蛄石には近頃偽造品が多いのだが、本物はやや重く、それを砕くと小片となるが重なり積もるのである。これを、蒸留すると揮発後残された液は匂いの強い濃い油状のもので、又一種の生臭さがある。又、これを酢に入れた場合、その構成物質の一部は溶けるが、粘液質は全く溶けず、この石の元の形はそのままである。更にこの石を消石精(水酸化カルシウム?)に入れても全く同様の結果である。しかし、偽造品は上記の二方法においては全く溶けることはないのである。この蝦は、アジア・アフリカの諸国に棲息している。またヨーロッパ、アメリカにも棲息しているが、その石は小形のものである。調べてみると、この石は舶来品が多くあり、また我国では津軽や松前地方で採れるが、生薬問屋などでは「オクリカンキリ」と呼んでいるが偽造品が非常に多いので、前記の外国資料を訳し解き明かしたものを十分参考にし、その真偽を判断、利用すべきである。我国の山口県下関市や大分県中津市近辺の川にいる普通の蟹にも「小石」があるが、その形は、ハト麦の実に似て表面は凸面であり、裏面は凹んでいるものである。この蟹は7月から8月の間に脱皮するがその瞬間を捕らえて切り開けば、必ず両目の間に2個の白石がある。但し、その体が未だ柔らかで歩き回ることが出来ないときに取るが必要で、そうでなければすぐに溶け出して米のとぎ汁のようになり、またその体も固くなるとのことである。この2個の白石は「蛸蛄石」の一種であって、その性質性能も全く同様である。

主たる効能 渋滞を収め乾燥させるものである。その組織にはアルカリ性の塩基を含み、胃中に停滞している強い酸味の液を消滅させる良薬である。それは、その組織に多くの粘液

を含んだ石灰質を持っているので、他の性質の制酸薬に比較すれば、アルカリ性が強くないので胃を刺激しないが、これはオクリカンキリが持っている独特の粘液質が敏感な胃の中の神経を包み込んで保護するからである。その故に強い酸味の液による胃痛を治癒するのである。だが、一方で他の薬と同様便秘をおこすので、適宜な下剤を併せて服用させる必要がある。この薬は、粘液を含んで緩和の性質があるので、疼き痛むいろいろな症状に最も効果がありその効能は「マグネシア・アルバ」でも減ることはない。それ故強い酸味の液による種々の症状—おくび、胸やけ、内臓に起こる刺すような痛み或は子供の引きつけや骨の未発達、クル病等に大きな効果があるのである。又、利尿、発汗、下痢止め。その服用法は、粉薬として一日38.4グラム～3.8グラムの量を数回にわけて服用すべきである。また、ガウラベリ塩を加えて体内の病毒や悪液を発汗と排便により取り除く方もある。さらに、橙の絞り汁や酢を加えてそのフツフツと沸き上がるのが止んだ後に服用すると強い発汗作用がある。

15『魚鑑』

著者は江戸の博物学者である武井周作である。影印本（武井、1978）の解説文によると刊行は天保2年（1831年）とされている。しかし、影印本の原本の詳細に関しては不明である。影印本の解説によると、作者の武井周作は本草学・オランダ医学を学んでいたが、蝦夷地に探検に行ったとの記録は見られない（武井、1978）。そのためオクリカンキリの薬効に関しては極めて正確な知識を持っていたと思われるが、ニホンザリガニの現地情報に関しては伝え聞いた情報と思われる。また『魚鑑』を通読した限り、内容は江戸で生活する一般人が魚を利用する時の実用書的に書かれている。そのためオクリカンキリの薬用の部分に関しては、江戸ではニホンザリガニが薬品として一般に広く知られていたと考えられる。

原文の大意を以下に示す。

ニホンザリガニは頭が蟹で腹部が蝦の形態を呈し、語源は退行することに由来する。北部の溪流に分布し、松前地方では「しまりがに」と呼ばれている。採集するときは味噌汁を使い、その味はエビに似ている。体内に結石があり、それは蠅蛄石と言われ、オランダ名ではオクリカンキリとなる。薬効としては水腫沈静、利尿作用、傷や破傷風に効くとされている。

原文は「志まりがに」の表記が見え、これは「しまりがに」と解説した。そのため当時の松前地方でのニホンザリガニの名称、オクリカンキリがオランダ語であり、それが薬用とされていたこと、胃石の薬効が明らかになった。

16『蝦夷言いろは引』

弘化5年（1848年）の写本で、小樽内糸谷喜左衛門旧蔵書を本研究では検討した。著者に関しては本調査で明らかに出来なかったが、内容は当時のアイヌ語の辞典で、いろは順の和語とアイヌ語の対語形式の辞書となっている。

サの項に「去蟹 サルカニ ホレカレフ テリンヘクル」とある（図4）。本史料の正確な成立年代は不明である。しかし1848年以前における、ニホンザリガニの名称の一つとしては、「サルカニ」の言葉が使われて、漢字表現としては「去蟹」であったことが分かる。これに対応するアイヌ



図4 蝦夷言いろは引

語としては、「ホレカレフ」「テリンヘクル」であったと思われる。

17『於幾能以志（おきのいし）』

著者は松浦武四郎、出版地は江戸、出版者は播磨屋勝五郎、別のタイトルとしては『東西蝦夷産物便覧』がある。安政2年序（1855）刊行で、蝦夷地は産物が豊かなことを知らせるため、蝦夷地における各地の産物を一覧表としている。著者の松浦武四郎は蝦夷地の各所を何度も探検し、その後膨大な紀行文を残した人物である。

内容としては蝦夷地54箇所の地区別の産物が一覧されており、標題の左脇には、項目が列になっており、項目欄の最上段は「地名」となっている（図5）。ここの右から4番目の項目は、「アブタ」となっている。ただし当該資料では、「アブタ」の表示と所蔵印が重複しているため、判読し難い。「アブタ」とは、現在の北海道の胆振支庁に位置する虻田町に該当すると思われる。「地名」と同列の項目として「奇品」があり、アブタに相当する右から4番目の項目では、「ヲクリカンキリ多し」とされている（図5）。そのため、当時の蝦夷地では胃石の名称が「ヲクリカンキリ」であり、それが珍しい品として扱われ、胆振地方の虻田町付近では多産していたことが伺える。

18『水谷本草』

草稿のまま残されたものが翻刻（水谷、2008）されているため成立年は不明である。多くの史料を転写・引用しており、『遠西医方名物考』（文政5年（1822年）刊）や『蘭畹摘芳』の図がある。編纂者である水谷豊文は蘭学を野村立栄、本草学を浅野春道・小野蘭山に学び、文政9年（1826年）に江戸参府中のシーボルトと熱田で会ったこともある。本書は水谷豊文の代表作で、当時の日本における最大の総合本草書である。ザリガニ類に関する記述は巻の50と60にあり、これは医者・蘭学者である宇田川椿齋（玄真）と宇田川榕菴著の『遠西医方名物考』を参考に行っている。

19『本草鏡』

著者は斎藤憲純で、9冊から構成され巻の甲～卷之壬がある。著者は京都の人、憲純は名、号は東溪、生没年は不明。著作には『本草鏡』『名物拾遺』『物類彙考』などがある。磯野直秀氏は以下の見解を持っている。『白井年表』には稻生若水の門下とあるが、活動した時期が18世紀後半であることから疑いが持たれる。著書である『本草鏡』などには松岡玄達のことや、玄達の門下のことがしばしば出てくるので、玄達の弟子かと思われる。

「巻之壬」のうち「介部・蟹の項」に以下の記述があった（図6）。

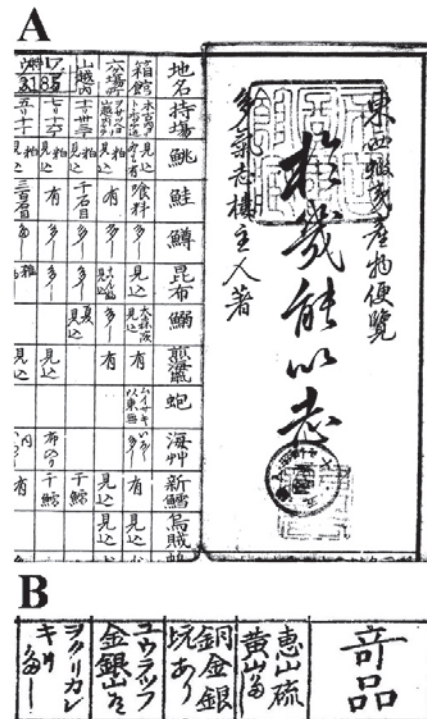


図5 於幾能以志
標題(A)と奇品にあるヲクリカンキリ(B)

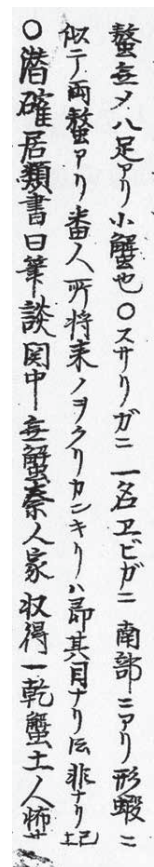


図6 本草鏡

「スサリガニ、一名エビガニ、南部ニアリ。形、蝦ニ似テ両螯アリ。番人所将来ノヲクリカンキリハ、其目ナリト云。非ナリ」

この大意としては、名称が「スサリガニ」であり、南部に生息し、形状はエビに似るがハサミがある。オランダ人が持ってくるオクリカンキリが、スサリガニの目というのは違う。本書は、本稿で見つかった史料の中では、江戸におけるザリガニに類する名称が始めて出てきた史料である。その形状や胃石に関して正確な理解がされている。

20『その他の資料』

胃石が薬として利用されていた物証として、札幌医史学研究会（1988）による口絵の写真がある。この解説には「解熱剤として使われており、幕府はこのオクリカンキリを蝦夷地から買い上げていた」と記述されている。本文では写真の詳細についての解説は見られなかったが、写真には胃石、ザリガニ類の乾燥標本が見られる。写真だけしかいないため、写っているザリガニ類の正確な種査定は行えなかったが、鉗脚の掌節の内縁には棘が発達しており、アメリカザリガニ*Procambarus clarkii*と酷似している。なぜ、オクリカンキリの標本中にアメリカザリガニが混入したのかは不明である。

（まとめ）

名称：江戸時代における蝦夷地、松前と江戸におけるニホンザリガニの名称として、松前の言葉である「ザリガニ」が各書物を通じて江戸に導入されていたと思われる。その時期を推定すると、「ザリガニ」の名称が見られる最も古い史料は本稿の範囲では『蝦夷風土記』（1774年成立）で、それ以前の史料では「オクリカンキリ」の言葉が使われていた。そのため「ザリガニ」の名称が江戸に伝わり、使われ始めたのは1774年以降と考えられる。また「ザリガニ」の言葉は史料によっては文字単位で濁点等が異なり「さりかに」等と表現されていることもあった。

- ・漢字：「去蟹」「退蟹」があり、その他にも中国語の「蜊蛄」が直接表記されている史料もあった。ザリガニの語源は後退りする蟹、との理解であった。
- ・アイヌ語：「タピシツンペコロペ」「テキンベコルベ」「テリンヘクル」「ホロカレフ」があった。川井（2007）はニホンザリガニのアイヌ語を調べ、地域により違いがあり多様であることを明らかにした。この報文において、アイヌ語は北海道教育委員会の調査成果である『アイヌ民俗文化調査報告書』の解析に基づいており、この調査報告はアイヌの専門家が明治・大正時代に生れたアイヌからの聞き取りにより得た情報を掲載したものである。それによると、ニホンザリガニの主なアイヌ語は「ホロカレイエツプ」と「テクンベコルカムイ」であった。以上のことから江戸時代から明治初期にかけて、アイヌ語におけるニホンザリガニの名称は、「タピシツンペコロペ」「ホロカレフ」「テキンベコルベ」等が用いられていたが、明治から大正時代になると主に使われるのは「ホロカレイエツプ」と「テクンベコルカムイ」であった。「タピシツンペコロペ」は、明治時代以降の主な表現で見当たらないが、「ホロカレフ」と「ホロカレイエツプ」、「テキンベコルベ」と「テクンペコロカムイ」は、それぞれ表記に共通部分が多い。
- ・胃石の名称：「ヲクリカンキリ」「オクリカンキリ」と表現され、漢字の表現としては「阿骨カ甘吉利」があった。
- ・胃石の利用：胃石が薬として利用され、諸病に効くとされ泌尿器系の疾病への薬品として利

用されていた記録もある。そして薬としての利用は、オランダ人が導入したと思われる。しかし、薬としての利用は中国の文献も参考にしていた史料もあったので、中国からも入っていた可能性もある。

謝 辞

貴重な御協力を頂いた北海道開拓記念館の水島未記氏、三浦泰之の両氏、御助言を頂いた慶應大学名誉教授の磯野直秀氏、英文部を修正していただいたGriffith University Dr. Jason Coughran、史料の複写と掲載を許可いただいた国立国会図書館、国立公文書館、北海道大学図書館に深謝します。

引用文献

- 比良野貞彦（翻訳・現代語訳・解説・解題、森山泰太郎・稲見五郎），1977. 奥民図彙. 山田龍雄・飯沼二郎・岡 光夫・守田志郎編，日本農業全集 I，農山漁村文化協会，東京，365 pp.
- 平秩東作（高倉新一郎写），1929. 東遊記，45丁.
- 板坂耀子編，2002. 近世紀行文集成，第1巻（蝦夷編）. 葦書房，福岡，526 pp.
- 梶島孝雄，1997. 資料日本動物史. 八坂書房，東京，652+27（解説）pp.
- 萱野 茂，1996. アイヌ語大辞典. 三省堂，東京，599 pp.
- 川井唯史，1995. ニホンザリガニ. VII. 甲殻類，日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料Ⅱ，日本水産資源保護協会，pp. 620-624.
- Kawai, T & J. F. Fitzpatrick, Jr., 2004. Redescription of *Cambaroides japonicus* (De Haan, 1841) (Crustacea: Decapoda: Cambaridae) with allocation of a type locality and month of collection of types. *Proceedings of the Biological Society of Washington*, 117: 23-34.
- 川井唯史・白濱和彦，2008. ニホンザリガニの博物学的研究Ⅱ. 小樽市総合博物館紀要，22: 9-20.
- 黒田秀俊解説，1979. 北方未公開古文書集成 1巻（寺沢 一他責任編集）（蝦夷志/著者 新井白石）（蝦夷随筆/板倉源次郎）（松前志/松前広長）. 叢文社，東京，240 pp.
- 串原正峯（高倉新一郎校注），1962. 夷諺俗話. 北海道郷土資料研究会，札幌，99 pp.
- 宮本常一・原口虎雄・谷川健一編，1970. 日本庶民生活史料集成，第10巻，農山漁民生活. 三一書房，東京，832 pp.
- 水谷豊文，2008. 本草綱目記聞（自第48巻至第60巻）. 武田科学振興財団，大阪，xviii+726，84 pp：第59巻「名物考」中の「サリカニ」「蛸姑石」と第60巻「蘭薬」中の「蛸姑」が該当する。
- 大友喜作編・解説・校訂，1943. 北門叢書第一冊（赤蝦夷風説考/著書 工藤平助）（蝦夷拾遺/著者 佐藤玄六）（蝦夷草紙/著者 最上徳内）. 北方書房，東京，410 pp.
- 大友喜作編・解説・校訂，1972. 北門叢書第二冊（北海随筆/著者 板倉源次郎）（松前志/著者 松前広長）（東遊記/著者 平秩東作）. 国書刊行会，東京，369 pp.
- 大槻玄沢（解説 菊地俊彦），1979. 紅毛談/蘭説弁惑，江戸科学古典叢書17. 恒和出版，東京，319+66（解説）pp.
- 大槻玄沢（解説 菊地俊彦），1980. 紅毛雑話/蘭畹摘芳，江戸科学古典叢書31. 恒和出版，東京，430+11（解説）pp.
- 札幌医史学会編，1988. 蝦夷地の医療. 北海道出版企画センター，札幌，201 pp.
- 新村 出監修，1927-1928. 海表叢書 巻2. 更正閣，京都，（本書は数章で校正され、章別に頁割されて

おり総頁数を示せない)。

新村 出監修, 1985. 海表叢書 巻2. 成山堂書店, 東京.

市立函館図書館編, 1969. 藤知文著「東夷周覧」. 郷土資料複製叢書6, 図書裡会, 函館, 98 pp.

高倉新一郎写, 1930. 東夷周覧 (福居知文選) (上・下・附録). 40丁.

武井周作, 1978. 魚鑑 (解説 平野 満) (生活の古典双書 18). 八坂書房, 東京, 167+11 (索引) pp.

寺沢 一・和田敏明・黒田秀俊編, 1979. 北方未公開古文書集成「第八巻 蝦夷風俗図絵」(蝦夷志 / 著者 新井白石) (蝦夷随筆 / 著者 板倉源次郎) (松前志 / 著者 松前広長). 叢文社, 東京, 240 pp.

寺島良安編 (解説は樋口秀雄), 1970. 和漢三才図会 (上). 東京美術, 東京, 800 pp (解説は6 pp).

寺島良安, 1980. 和漢三才図会 (日本庶民生活史料集成28巻). 遠藤鎮雄編, 三一書房, 東京, 933 pp.

寺島良安 (訳注者 島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳), 1987. 和漢三才図会7 (全18巻). 平凡社, 東京, 442 pp.

山口隆男編, 1993. シーボルトと日本の博物学、甲殻類. 東京, 日本甲殻類学会, 731p.